

其顔面の手法といひ、衣服の折目といひ、ギリシヤ化した手法の否み難い跡があるとしても、こゝには、之を超えるといはなければ、止むを得ない事情になつて居るのである。佛陀像の原始的な印度固有の典型があつたに相違ないといふ事を支持する者が多くとも、不幸にして、未だ之を發見しないのであつて、前掲の講演中で説明した佛教古代派の發達を見られた讀者は、到底この古代型を見出す機會は、極微塵に止まる事を了解せられるであらう。(特に、上文印度古代派參照)

されば、此の事情をこのまゝで承認して、反證を得るまでは、一般に『ギリシア風佛教』派と稱するもの、創作であり、その製作の印があるものを以て、あらゆる現存佛像の祖と見なしておかう。之でこゝの探究は大に進んだので新たに、始めの問題で佛陀の印度ギリシア型の點を取れば、之は、兩文明が接觸した印度西北境で、西曆頃に生れた事は、既に何人も知る所であるが、此の點を稍一層明かにしよう。但し猶ほ極めて大體である此等の與件は、之を明確にする必要が大にある。従つて、こゝでは、最初の印度ギリシア風佛像